

[1] 金子晴勇（2002）『ヨーロッパの人間像』知泉書館。

一般にデカルトの懐疑は「方法的懐疑」と呼ばれるように、認識の上で絶対的明証に達する方法として遂行されている。それゆえ、彼は疑おうと意志している。もちろん疑うことは「考える」一様式であって、疑う人は必ず考えている。したがって、疑っている行為者自身、つまり「考えている自我」は自証的に在るにしても、観念上の存在に過ぎない。また自我の面前に広がっている世界のすべては「延長」をもって存在しており、その本質的属性が物的な「延長」に他ならない。ここから物心二元論が説かれ、デカルト哲学は展開してゆくのであるが、これまで存在していた宇宙との一体観は喪失し、宇宙は生命のない単なる認識上の存在となり、宇宙との生命的な関連を断ち切り、自我にのみ中心をもつ近代的な人間が誕生している。こうして「人間の尊厳」は彼においては自我にのみ中心をもつ「尊大」に変質しているのではなかろうか（金子 2002, 164）。